



TITLE:

# 清代江南デルタの郷鎮志と地域社會

AUTHOR(S):

森, 正夫

---

CITATION:

森, 正夫. 清代江南デルタの郷鎮志と地域社會. 東洋史研究 1999, 58(2): 294-331

ISSUE DATE:

1999-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155248>

RIGHT:

# 清代江南デルタの郷鎮志と地域社會

森 正 夫

はじめに

- 一 江南デルタの郷鎮志の編纂年代
  - 二 郷鎮志の名稱の成立と鎮域の認識
  - 三 郷鎮志の相互認識と地方志の體系の認識
  - 四 官志との相違・人としての責任
  - 五 郷鎮志の編者と地域社會
- (一) 『棲乘類編』——十八世紀六十年代纂、未刊の稿本
  - (二) 『黎里志』・『黎里續志』——十九世紀初頭の刊本・十九世紀末の刊本
  - (三) 『錢門塘鄉志』——十八世紀末・十九世紀前半・十九世紀後半における稿本の繼承と二十世紀の油印本
- む す び

はじめに

郷鎮志は、現存のものに即して言えば、清代の江南デルタで數多く編纂されるようになる。<sup>(1)</sup> こうした動向の先蹤をなす明代後半期のこのデルタの四種の郷鎮志を對象として筆者の先年試みた検討によれば、<sup>(2)</sup> それらは、編者の自發的な意志によって企畫されたこと、市鎮を基盤とする地域社會への編者の明確な自己同定意識に裏附けられていること、当該市鎮の

直面する切實な課題への關心を反映していること、編者自身が人びとからの取材・文獻收集・執筆に従事していること、そして各志がそれぞれに強い個性をもっていることなどによって特徴づけられる。量的擴大を見た清代江南デルタの郷鎮志も、明代後半期のそのものもつこうした編纂における内發性を繼承していくとみなされるが、かつて別の機會に言及したように、そこには内發性を觸發する新たな外的契機が作用しているように思われる。第一は、鄰接する他の市鎮における郷鎮志編纂の動向への鋭敏な認識である。これは、市鎮が群をなして分布し、市鎮の住民が他の市鎮の存在を強く意識するようになったことを反映しているのではないか。第二は、一統志—省志—府志—縣志という地方志の序列の存在と郷鎮志の編纂との關連とについての認識の高まりである。市鎮が、國—省—府—縣というように王朝國家の行政體系の末端に組み込まれつつあったことを示すものではないか。本稿では、清代江南デルタの郷鎮志についての以上のような豫測を手がかりとし、また民國初年における動向にも注意しながら、その特徴を具體的に檢證し、あわせて郷鎮志の編纂とその基盤をなすところの市鎮を中心とする地域社會のあり方との關連についても考察する。

江南デルタの市鎮を中心とする地域社會については、九十年代に入つて急速に研究が進んでいる。稻田清一は、九二年から九三年にかけ、デルタ北部の太倉州寶山縣・嘉定縣と松江府青浦縣一帶において、一八世紀末から一九世紀前半、乾隆末年から嘉慶年間を経て道光初年に至る頃、市鎮を中心とする地域社會を單位とし、民間資金としての捐に依存し、市鎮に居住するかもしれないそこを主たる生業の場とする生員監生層が董事として統括する救荒が行なわれたこと、及びその活動範圍が善舉・水利・修橋修路など「地方の公事」に擴大し、その過程で本來は救荒の際の「賑給所」であった「廠」が事實上の地方行政區劃化していくことを明らかにした。<sup>(4)</sup> 稻田は、本年、松江府上海縣陳行鎮の事例に即して十九世紀の少なくとも後半には、鎮董層の擔うところの傳統的な善舉とも、官治の單なる補助とも異なる「地方公事」という活動領域が成立し、それが清末の地方自治に連なる積極的意味をもつという展望を示した。<sup>(5)</sup> 他方、太田出は、昨年、松江府の金山縣、蘇州府の吳江・震澤兩縣に即し、これまで殆ど考察されてこなかった軍事組織としての綠營の、大汛・小汛からな

る汛防制度に目を向け、大汎は市鎮を中核とし、市場圏としての意味をもつ地域社會全體を管轄區域とし、小汎は市鎮と農村あるいは市鎮間を結ぶ交通路に配置され、人の移動や商品の輸送の安全を内容とする警察業務に従事していたこと、大汎の管轄區域はやはり清末の自治區域となる場合があることを明らかにした。<sup>(6)</sup> 稻田と太田の見解は、同じ江南デルタについても對象とする地區が異なり、行政と地域社會との關連をめぐる接近方法にも違いがあるが、市鎮を中心とし、一定の領域をもつ地域社會が、十九世紀前半の時點において成立していたことを具體的に提示している。本年、中國の張研は「清代市鎮管理初探」を發表し、稻田・太田とは異なる視點から、江南デルタの市鎮の管理體制は相互に交錯することを特徴とするという見解を表明した。<sup>(7)</sup> また、すでに昨年、佐藤仁史は、稻田の取りあげた陳行鎮鎮董秦榮光の長子秦錫田に着目し、舉人にして任官經驗をもち、後に地方自治の中で、江蘇省、上海縣及び陳行郷それぞれの議員をつとめたこの秦錫田に即して、清末民國初の政治變動を検討し、當時の江南農村部においては、市鎮を存立基盤とする有力者層によって統合される社會が實體的な「地域」の一つとして形成されており、この統合の場が清末の自治の中で行政最末端の郷として組み込まれると論じた。<sup>(8)</sup>

ちなみに、九十年代の日本における上記の研究の前提には、八十年代において江南デルタにおける土地廟の廟界を緻密に検討した濱島敦俊の作業や、同じく江南デルタの都市としての市鎮における善堂の活動を始めて解明した夫馬進の業績があることに注意しておきたい。<sup>(9)</sup> 筆者も九二年、デルタ中央の青浦縣朱家角鎮を對象として明代から現代に至る通史的敘述を試み、この間の地域社會の具體的存在形態に關する素材を提示した。<sup>(10)</sup>

本稿における江南デルタは、現在の江蘇省長江以南地區（蘇州市轄區・常州市轄區・無錫市轄區・鎮江市轄區の管轄地域と南京市轄區管轄地域の一部）、浙江省北部地區（湖州市轄區・嘉興市轄區・杭州市轄區管轄地域）及び上海市を指す。すなわち、清代の蘇州府・常州府・鎮江府・江寧府の一部、湖州府・嘉興府・杭州府、太倉直隸州及び松江府にほぼ見合う領域である。本稿の検討の基盤をなすのは、主として一九八三年以降、上海、南京及び北京のいくつかの圖書館で筆者が閲覽・筆寫

表1 現存する江南デルタ郷鎮志の編纂年代

時 代	上海市	江蘇省	浙江省	合 計	百分比
宋 代・紹定 (1228—1233)			1	1	0.45
小 計			1	1	0.45
明 代・正徳 (1506—1521)			1	1	0.45
嘉靖 (1522—1566)		1	1	2	0.90
萬曆 (1573—1619)			1	1	0.45
崇禎 (1628—1644)	1	2	1	4	1.79
明代不明			1	1	0.45
小 計	1	3	5	9	4.04
清 代・順治 (1644—1661)		3		3	1.35
康熙 (1662—1722)	1	8	2	11	4.93
雍正 (1723—1735)		3	2	5	2.24
乾隆 (1736—1795)	5	11	9	25	11.21
嘉慶 (1796—1820)	14	6	5	25	11.21
道光 (1821—1850)	1	15	6	22	9.87
咸豐 (1851—1861)	2	1	3	6	2.69
同治 (1862—1874)	2	3	8	13	5.83
光緒 (1875—1908)	12	15	8	35	15.70
宣統 (1909—1911)	4	2	1	7	3.14
清代不明	5	4	2	11	4.93
小 計	46	71	46	163	73.09
民 國・民國 (1912—1949)	18	20	12	50	22.42
民國不明			1	1	0.45
小 計	18	20	13	51	22.87
總 計	65	94	64	223	

森正夫「朱家角鎮略史」（森編『江南デルタ市鎮研究』。名古屋大學出版會。1992年）  
 所載の表1を森「江南デルタ郷鎮志目錄」（森編『舊中國における地域社會の特質』。平  
 成2年—5年科學研究費補助金・一般研究A研究成果報告書）により補訂。

してきた郷鎮志  
 であり、その  
 多くは、一九九  
 二年刊行の『中  
 國地方志集成』  
 「郷鎮志專輯」  
 三十二冊に所収  
 されている。<sup>(11)</sup>し  
 かし今や直接手  
 にとって読み得  
 るようになった  
 當該「專輯」所  
 收の郷鎮志二五  
 四種の過半を占  
 める清代の江南  
 デルタ郷鎮志の  
 全頁を検討しつ  
 くすことはまだ  
 なし得ていない

## 浙江省の縣志・府志・省志の編纂年代

時 代	上海市	江蘇省	浙江省	合 計	百分比
清 順治	1	9	12	22	1.67
康 熙	8	75	106	189	14.32
雍 正	4	10	14	28	2.12
乾 隆	14	58	57	129	9.77
嘉 慶	4	31	24	59	4.47
道 光	3	35	32	70	5.30
咸 豐	1	9	7	17	1.29
同 治	4	17	17	38	2.89
光 緒	16	67	55	138	10.45
宣 統	2	18	3	23	1.74
清 代 不 明	0	41	2	43	3.26
小 計	57	370	329	756	57.27
民 國 民 國	24	113	71	208	15.76
民 國 不 明	0	28	0	28	2.12
小 計	24	141	71	236	17.88
總 計	98	680	542	1320	

金恩輝主編・胡述兆共同主編『中國地方志總目提要』（漢美圖書有限公司。1996年）上册所載の上海市、江蘇省及び浙江省の各地方志目録から算出した。見出しの縣志には散州志が、また府志には直隸州志が含まれる。なお当該上册所載「江蘇方志編纂成書時代表」の様式を参考にした。

ため、從來から注意して閲讀してきたそれらの序・跋・凡例を主たる手がかりにしながら作業を進めたい。

# 一 江南デルタの郷鎮志の編纂年代

現存する江南デルタの郷鎮志は、表1に示すように、中華民國期を除く清代以前の段階では、一一・二一％の乾隆期、同じく一一・二一％の嘉慶期、九・八七％の道光期、一五・七〇％の光緒期という四つの朝代に數多く編纂された。このうち乾隆期は六十年にわたるので、二五年の嘉慶期や、三〇年の道光期、三四年の光緒期の編纂の比率が、密度という點ではより注目されねばならない。十八世紀の三十年代以降に相當する乾隆期は、嘉慶・道光と續く郷鎮志編纂の最初のピークの前提となった時代であり、十九世紀の最後の四半世紀と二十世紀初頭を占める光緒期は清代までの段階では最も多くが編纂された時代

表2 現存する上海市・江蘇省・

時 代	上海市	江蘇省	浙江省	合 計	百分比
南朝・唐 小 計		1	5	6	0.45
北 宋 小 計		2	1	3	0.23
南 宋 小 計	1	16	16	33	2.50
元 小 計		5	5	10	0.76
明 代 不 明	武 樂 統 順 化 治 德 靖 慶 曆 啓 禎 明	2		2	0.15
		1	1	2	0.15
		2	1	3	0.23
		3		3	0.23
		2	8	10	0.76
		1	8	19	1.44
		5	4	17	1.29
		2	32	64	4.85
		8	3	11	0.83
		4	38	89	6.74
		2	8	13	0.98
		2	12	29	2.20
		0	0	14	1.06
小 計	16	145	115	276	20.90

である。中華人民共和國成立の一九四九年、民國三十八年までの民國期は後にも觸れるように二二・四二％で、全時代を通じて最も多数の郷鎮志が編纂されている。

ここで注意したいのは、江南デルタの現存郷鎮志編纂数の變遷と、上海市及び江蘇・浙江兩省に屬する地域における現存する縣志（散州志を含む）、府志（直隸州志を含む）及び省志の全體、すなわち總志を除く縣志以上の地方志の編纂数のそれとの間に見られる相異である。表2の現存する上海市・江蘇省・浙江省の縣志・府志・省志の編纂年代は、金恩輝主編・胡述兆共同主編『中國地方志總目提要』上册所載の上海市、江蘇省及び浙江省の各地方志目錄から算出したものである。なお當該上册所載「江蘇方志編纂成書時代表」の様式を参考にしている。この表には本稿で用いるところの江南デルタには屬さない部分、すなわち江蘇省の長江以南を除く以北の部分

分、浙江省の北部地區を除く部分が包含されているため、それを用いて江南デルタのみに限定した郷鎮志と縣志以上の地方志との比較を行なうことはできない。しかし、江蘇省の地方志のうち、長江以北を除く以南の部分は六二・三六%を占め、浙江省の地方志のうち、北部地區の部分が三九・九三%を占めており、表2のおおよその傾向と表1の江南デルタ郷鎮志の編纂数に見られる上述の特徴を比べることは許されるであろう。

そこでまず明白なのは、江南デルタの郷鎮志においては、元以前の編纂になるものがわずかな南宋の一點で〇・四五%を占めるのみであるのに對し、縣志以上の地方志について見ると、元以前は五二點で、三・九四%に達していること、同じく明代では江南デルタの郷鎮志がわずかに九點で四・〇四%なのに對し、縣志以上の地方志について見ると、明代は二七六點で、二〇・九〇%に達していることである。他方、清代では、江南デルタの郷鎮志が一六三點で、實に七三・〇九%であるのに對し、縣志以上の地方志は七五六點で、五七・二七%であり、大宗を占めるものの、江南デルタの郷鎮志の壓倒的比重には及ばない。清代については興味深い、いま一つの特徴がある。乾隆年間とはほぼ等しい約六〇年に及んだ康熙年間の比重である。江南デルタの郷鎮志におけるその比重は十一點、四・九三%に止まるが、縣志以上の地方志は一八九點で、十四・三二%となっており、康熙年間との比重は非常に高い。ちなみに、一九四九年までを含む民國期は、江南デルタの郷鎮志が五一點で二二・八七%、縣志以上の地方志が二三六點で、一七・八八%となっており、やはり江南デルタの郷鎮志の比重が高い。このように江南デルタの郷鎮志の編纂数の時代別變遷と、上海市・江蘇省・浙江省の縣志以上の地方志の編纂数のそれとを對比する時、そこには明確な對比があり、前者が清代、中でも乾隆期以降に、そしてとりわけ嘉慶・道光期以降に集中的に編纂され、民國期にもその傾向が續いたことが確認できる。

## 二 郷鎮志の名稱の成立と鎮域の認識

その對象とする地域が主として市鎮を中心としていることを郷鎮志の名で呼ばれる地方志の特徴であるとするならば、



最近の日中學界でむしろ普及してきたこの呼稱についての考察はさほど重要な意味をもつものではない。なぜなら、周知のように、南宋の浙江ですでに『澈水志』<sup>(13)</sup>が編纂されており、明代の江南デルタにおいてもそれぞれ個性をもつ九種の地方志が編纂されているからである。しかしながら、「郷鎮志」あるいはこれに類する「郷志」「鎮志」等の呼稱が、ほかでもなく清代に成立したとみなされることは見逃すことができない。なぜなら、この種の地方志が数多くの市鎮で編纂されるようになったことと、こうした呼稱の成立とは内的な関連をもっていると思われるからである。

乾隆十七年（一七五二）の江蘇南部の『信義志』<sup>(14)</sup>（現崑山市正儀鎮）における「郷志」の語がこの種の呼稱の嚆矢だとみなされる。以下の引用文に言う「兩邑合志」とは乾隆十六年（一七五二）刊の『崑山新陽合志』を指す。

今、兩邑合志、新に作る所有り。（中略）則ち信義志作ること無かるべきに似たり。然りと雖も信義は古の名區にして、人文事蹟、他處に倍せり。郡志足らざれば乃ち邑志有り、邑志足らざれば乃ち郷志有り。則ち信義志の作ること有るは固より宜（むべ）なり。

（敘。王荃撰）

その十四年後、乾隆三十一年（一七六六）、浙江北部の『東西林彙考』<sup>(15)</sup>（現湖州市雙林鎮）において「郷鎮志」の呼稱がはじめて登場する。

郷鎮志は郡邑志と同じからず。凡そ事目の郡邑に通關し、専らは本地に屬さざる者は載せず。惟だ一方の故蹟は、巨細漏らさず。

（凡例）

『郷鎮志』は「郡邑志」、すなわち、府志・縣志との明確な對比の下に範疇化されている。その後、約百年を隔てた道光二十八年（一八四八）に、江蘇南部の『元和唯亭志』<sup>(16)</sup>（現蘇州市唯亭鎮）でこの語が用いられている。

惟だ先孝廉嘗て以爲へらく、郷鎮志は郡邑の逮ばざる所を佐く。吾里は彈丸なりと雖も、而かれども人文の故實は徴する無かる可からず、と。

（自序。編者沈藻采撰）

『元和唯亭志』の冒頭に置かれた道光二十七年の朱珔の序に、

郷鎮の志に至りては、今に於いて特に盛んなり。

とあり、郷鎮志自體の編纂が當時特に活潑であると認識されていたことと併せて考えれば、この頃の江南デルタでは、「郷鎮志」の語もまたしだいに普及していったと見なされる。そして、この一節の示すように市鎮自體の一般呼稱としての「郷鎮」という語も廣がっていたのである。

もとより市鎮を對象とする地方志の一般呼稱が「郷鎮志」にのみに限定されていたわけではない。光緒五年（一八七九）編纂の江蘇南部、太倉州寶山縣の『羅店鎮志』<sup>(17)</sup>（現上海市寶山區羅店鎮）に、

嘉慶間、范翼王先生鎮志を輯有せられしも、未だ梓するに及ばずして稿佚せり。

（序・嘉定〔縣〕楊恆福書）

とあるように、「鎮志」の呼稱も當然存在する。特定の市鎮の地方志がしばしば「某々鎮志」と名付けられていることからすれば、「鎮志」の呼稱こそ最も普遍的であったかもしれない。

江南デルタにおいて市鎮を對象とする地方志に向けられた「郷鎮志」をはじめ、「郷志」、「鎮志」などの呼稱が、このデルタでの郷鎮志編纂の量の上での劃期というべき、清代の乾隆、嘉慶、道光及び光緒という諸時期に成立・普及していく動向は、現在郷鎮志と總稱されるこの種の地方志の歴史の中で、この時代がとりわけ大きな意味をもっていたことを示す。

まさに乾隆年間以降のこの時期には、郷鎮志編纂者における鎮の境域への認識も明確になってきた。もとより郷鎮志自體が、現存のものに即していえば、わずかではあるが、上述のように、明代すでに九種編纂されている。前稿で觸れたように、正徳十一年（一五一六）纂『新市鎮志』<sup>(18)</sup>（現湖州市德清縣新市鎮）の「鎮名」の項に續く「至到」の項では、たとえば、東の崇徳縣十六都石龜村、西の德清縣〔城〕、東北の烏程縣烏鎮（現桐鄉市烏鎮鎮）などと新市鎮との距離が明記されており、鄰接する地域との關連における新市鎮の位置への認識が窺われる。同じく前稿でとりあげた萬曆二十九年（一六〇一）刊『烏青鎮志』<sup>(19)</sup>卷一・疆域沿革志においても、西南の歸安・崇徳、東北の秀水、西の烏程、東の桐鄉、西北の吳江

など六縣〔城〕への距離が明記され、烏鎮の位置への認識の存在が判明する。しかしながら、清代乾隆年間以降の郷鎮志には、凡例・序を中心に、編纂者の鎮域に對する認識が、市鎮の活動や機能と結びつけられて、より具體化しつつあることが示されている。たとえば、乾隆五七年（一七九二）編纂、現在の常熟市唐市鎮の『唐市志』<sup>(20)</sup>の例言には、第一項に「唐市は虞邑の巨鎮爲るも、其の間の風土人物は、郡縣志安くんぞ能く備さに載せんや。（下略）」とあるのに續き、

附鎮の郷邨の市中に於いて貿易せる、及び都を同じくせる者も、閒ま亦た採入す。

とあり、鎮に鄰接し、鎮の市で賣買を行なう人びとを擁する村落をも記述の對象とする場合のあることを示す。ちなみに、鎮の市の賑わいについては、同書卷頭にある、同鎮の人、編者倪賜の同學である許朝の序に、

市の居民は裁かに三四百家、湫隘（低濕で狹隘）にして利に奔る。天未だ旦ならざるに、戸ごとに篝火し、魚米・雜物を貿し、謹<sup>カン</sup>なること鵝鵝<sup>ガガ</sup>（軍陣）の聲よりも甚だし。

と記す。市鎮と周邊農村との關係に關する同様の認識は、嘉慶十三年（一八〇八）編纂の『安亭志』<sup>(21)</sup>（現上海市嘉定區安亭鎮）凡例にも以下のように見られる。

一 関の市、四郷の民、朝に往き暮れに歸ること、猶お四境の城邑に聯なるがごときなり。

江南デルタにおいて、市鎮の市街地と周邊の農村とが商品の交換を通じて結合し、鎮域ともいべき場がこのように形成されていることが、唐市志や安亭志において明確に認識されていたのである。こうした場が縣の低位の行政區劃に準ずる領域としての性格をもつに至ったことは、先述のように、近年稻田清一や太田出によって解明されつつある。稻田は、こうした鎮域の形成過程の時間的推移を江南デルタ北部の高郷に位置する嘉定・寶山兩縣に即して具體的に明示しており、寶山縣では、賑給を受け持ち、「廠面」とも呼ばれる領域としての「廠」が設置されはじめるのは乾隆六十年（一七九五）からであり、嘉慶十三年（一八〇八）の水害後ほどない時点で、市鎮と「廠」の領域をなす周邊農村との關係に言及した資料が残されたことを明らかにする。さらに、道光三年（一八二三）の大水害時の救荒に際して縣下十一の市鎮に

「廠」が設置されたが、その領域が安定し、清末の地方自治區劃に移行する形に落ち着くのは、一八七〇年代後半、寶山縣では遅くとも光緒の初め頃、嘉定縣では光緒末年であった、とする。

たしかに、本來嘉定縣に屬し、雍正三年（一七二五）から寶山縣に編入された羅店鎮については、光緒五年（一八七九）の『羅店縣志』<sup>(23)</sup>卷一「里至」に、まず、

鎮の界至有りて、鎮を別つ所以は、猶邑の界有りて邑を別つ所以のごときなり。顧みるに、或いは同に一邑に隸すれば、之を誌すは贅なるに似たるも、知らざりき、繡壤相連なり、既に各おの夫の廠域を分てば、則ち方隅の至る所、自ら其の里程を按ずべし。（下略）

と、「廠域」の確立を述べた、またその後の割注には次のようにある。

康熙九年水災。嘉定鄉鎮、粥廠を分設して饑を賑わす。後自り公事に遇有すれば、城鄉各鎮、廠を分ちて辦理す。而うして鎮遂に廠を以て名づく。

このことを傍證するのは、雍正二年（一七二四）までは同じく嘉定縣に屬していた現上海市虹口區江灣鎮の鄉鎮志で、民國十年（一九二一）編纂の『江灣里志』<sup>(24)</sup>所載の『舊序』の一つ、道光八年（一八二八）に、「里人」、すなわち、同鎮の人、盛大鏞が記したものであらう。ちなみに、稻田も「寶山縣・嘉定縣における『廠』設置の歩み」という表の中で、この「舊序」を典據の一つとして擧げている。<sup>(25)</sup>

且つ里の界限、志家類ね區畫清からざる多し。乾隆六十年に賑を辦じて自り以來、鎮を按じて廠を設け、鄉圖を分領せしめ、官爲に之を定むれば、則ち界限據る可きなり。

もとより、市鎮の活動や機能に應じて、「廠」という形での「鎮域」が行政的に確立していた嘉定・寶山兩縣一帯のようなケースは他にはまだ確認されておらず、吳江・震澤兩縣における大汎と市鎮を中心とする市場圏との關係を明らかにした太田もそれをただちに一般化してはいない。<sup>(26)</sup> 鄉鎮志全體について見る限り、多くの場合は、鄉鎮志が編纂される際、

中心地としての市鎮の活動や機能を前提としながら、編纂の対象領域としての鎮域が編者の知見によって設定されたものとみなされる。以下の『周莊鎮志』(現崑山市周莊鎮)の記事はその典型であり、ここでは巡檢司の境域と編者陶煦の見解による鎮域との差異が示される。<sup>(27)</sup>

周莊巡檢司の轄する所は八都一百三十七圖にして、界域遼濶、且つ俱に鎮の北及び西北隅に在り。而うして鎮の西南と鎮の東南隅に附する者は、皆轄する所に非ず。茲に鎮に近き六七里内に就きて蒐錄し、巡司の所轄を以て限りと爲さず。

(光緒八年—一八八二—編纂『周莊鎮志』・凡例)

市鎮を中心とする地域社會は、十九世紀に入る頃から、一方で清末の地方自治にも繼承される行政領域としての性格を強めつつ、他方ではこうした行政領域に收斂しきれない側面を残していたと思われるが、市鎮を媒介として求心性をもつ地域的な社會統合の場が形成されていたこと自體は確かである。

### 三 鄉鎮志の相互認識と地方志の體系の認識

清代乾隆年間以降の江南デルタにおける鄉鎮志の編纂の量的急増、「鄉鎮志」「鄉志」「鎮志」などの呼稱の登場、及び幾人かの鄉鎮志編纂者の認識における市鎮の境域——鎮域——の明確化が進むことは、以上に見た通りである。これら一連のこととは、いずれも市鎮の住民の鄉鎮志編纂への意欲の高まりを示すものであるが、そこには二つの大きな契機が介在していた。一つは鄰接して存在する他の市鎮における鄉鎮志編纂の動向であり、いま一つは、その位置する縣における縣志の存在を基底とし、府志を経て省志に至り、最終的には全中國レベルの一統志にも連なる官撰の地方志の存在である。まず、前者から檢證していこう。

乾隆三十七年(一七七二)に編纂され、嘉慶十年(一八〇五)に刊行された『婁塘鎮志』<sup>(28)</sup>(現上海市嘉定區婁塘鎮)巻頭の編者陳曦の「婁塘志序」には次のようにいう。

吾邑、宋の寧宗嘉定十年に縣を建てし自り以來、元の秦輔之に迫びて始めて志を作る。嗣後、邑宰屢次纂修すれば、掌故乃ち備わる。它的様谿・諸翟・紀王・安亭・外岡諸鎮の如きも亦た各おの書を有し、以て一方の事を志す。程國棟の志（乾隆七年刊『嘉定縣志』）中に、諸書觀るに足らずと謂うと雖も、然れども此れを之れ無き者に較べ并ぶれば、則ち固より愈れり。今婁塘は區區の地なるも、獨り取りて之を志す者有ること無ければ、後の斯に生長する者、其れ何に従りてか致信せんや。

同じ嘉定縣に展開する様谿（南翔）鎮、諸翟鎮、紀王鎮、安亭鎮、および外岡鎮にはすでにそれぞれの志が存在しており、もし婁塘鎮のみ志のないままに置かれれば、鎮の後進が眞實を考察するよりどころが無くなる、という。咸豐三年（一八五三）の『黃渡鎮志』<sup>(29)</sup>（現上海市嘉定區黃渡鎮）には同縣のその後の状況について傳える。

程國棟、嘉定志を作りて謂う。邑中、鎮の最も久しき者は、南翔、安亭、黃渡なりと。攷うるに、前明の中葉、已に大場、江東、外岡の三志有り。國朝嘉慶間、他鎮次第に書を成し、瞿中溶、嚶邑志林六十一卷を彙刻し、搜羅大いに備わるも、獨り我里のみ書無きを以て與かるを得ざるなり。

（自序）

嘉慶年間に入り、嘉定縣内の他鎮でそれぞれの志が編纂されていくのに、黃渡鎮にはそれがなく、瞿中溶の手になる『嚶邑志林』六十一巻にも收録されなかったという。『嚶邑志林』は、上海の地方志についての詳細な研究書である上海師範大學圖書館編『上海方志資料考録』<sup>(30)</sup>に、「清嘉慶間刊本。全書は未だ見るをえない。ただ『石岡廣福合志』の扉に『嚶邑志林』という叢書の名が題されている。」（乙編 專志部分。一 綜録。1 叢刊）とあるように、今日では佚書となっている。ただ、『上海方志資料考録』の右の箇所には、上海博物館の吳靜山氏が提供したとされる目次が提示されており、それによれば、南翔鎮志十二巻、安亭志二十巻、婁塘鎮志九巻、續外岡志二巻、石岡廣福合志四巻、淞南志八巻及び馬陸志六巻によって構成されている。一つの縣の中で鎮という都市的集落がいくつも存在することが誰の目にも明らかになり、しかもそれぞれの鎮における鎮志編纂の動向が顯著になってきた時に、自己の住む鎮における鎮志の缺落は、克服

されるべき緊要の課題の一つとなつたのである。

蘇州府下の吳江縣においても同様の認識が見られる。同縣の蘆墟鎮について道光二十二年（一八四二）纂、同二十七年刊の『分湖小識』<sup>(31)</sup>では、

分湖、地は吳江に屬し、縣治を去ること東南六十里、唐宋以來、代よ聞人有るも、其の乘に登るを得る者、未だ僕を更（か）えて數うるに易からず（きわめて多い）。然れども、乾隆丁卯の年（十二年。一七四七）、沈徵君、志（『乾隆吳江縣志』）を脩めて自り後、今に迄るまで將さに百年に及ばんとし、邑中の諸鎮、同里、盛澤、黃溪、黎里、均しく人の其の里志を刻して、以て采訪に備うるも、獨り分湖焉を聞く無し。  
（自序。編者柳樹芳撰）

同じく吳江縣に屬する同里（現吳江市同里鎮）、盛澤（現吳江市盛澤鎮）、黃溪（現吳江市盛澤鎮東北黃家溪村）、黎里（現吳江市黎里鎮）の諸鎮には、いずれも「里志」（鎮志）が編纂されているのに、分湖（現吳江市蘆墟鎮）のみはそれがない。もし、前回の刊行からすでに百年を経ようとしている吳江縣志が改めて編纂されれば、これら四つの鎮はこの新縣志の資料収集や聞き取り調査の對象となるが、分湖だけはその埒外に置かれる。編者は他の鎮における鎮志編纂の動向を見ながら、このような所感を述べている。そこには、自己の居住する地域の記録を縣志にどのように盛りこませるかという觀點からではあるが、平行して存在する鎮との横ならびの發想がきわめて率直ににじみでている。

市鎮の住民の鄉鎮志編纂への意欲の高まりを示すいま一つの契機としての官撰の地方志の存在はどのような影響を與えたであろうか。その位置する縣における縣志、この縣の屬する府志、省志、さらに天下——全國を對象とする一統志に至る官撰の地方志の系列の存在は、どのような意味で鄉鎮志編纂の契機となるのであろうか。その最も一般的な意味は、鄉鎮志がなければ、縣志以上の官撰の地方志編纂の際、後世の記録に留められるべき鎮の事跡が省略され、削除されるので、それを防止するという點にある。こうした意味での鄉鎮志編纂の認識の必要性は、すでに康熙年間に見られる。康熙五十七年（一七一八）に編纂された稿本が抄本として残されてきた『紫隄村志』<sup>(32)</sup>（現上海市閔行區諸翟鎮）の卷頭に、編者汪

永安の「後序」に先立って掲載されている王晦なる人物による康熙十七年（一六七八）の「原序」には、次のように言う。ちなみに、紫隄村は當時、蘇州府嘉定縣、松江府青浦縣、松江府上海縣という二府三縣の境界地域にあった諸翟鎮の雅稱であり、一九八四年夏訪問した際には、上海市の西方郊區の農村の一角に、老街が残り、茶館には汗だくで熱演する評談師の前で自轉車で乗り附けた澤山の年配の男性が聞き入っていた。

郷城は皆王土なり。然れども村蹟は、縣志に入れば則ち已に略され、府志に入れば則ち尤も略さる。始めを略するを以てすれば、久うして必ず遺（わす）らる。況んや地二郡三邑を兼ねること紫隄の如き者は、安くの所にか各乗を彙めて之を詳觀するを得んや。

「村蹟」の村は、鎮の雅稱、蹟は事跡。「王土」の一部分であるのに、縣志ではその事跡が省略され、府志ではなおのこと省略される。従って鎮の事跡を記録する固有の「村志」がなければならぬというのである。

雍正十年（一七三三）編纂の『平望鎮志』<sup>(33)</sup>は、當時の蘇州府吳江縣平望鎮、今も變わらぬ水陸交通の要衝としての吳江市平望鎮を對象として編纂されており、その唯一の序は、蘇州府學教授で、鄰府常州府宜興縣の人、儲元升の手になる。

地志には四有り。曰く一統志、曰く通志、曰く府志、曰く縣志。就中、惟だ縣志のみは紀載較や詳らかなりといえども、然れども邛若しくは鎮に至れば、豈纖悉備さに書く能わんや。則ち村鎮の志有るは、邑乘の闕を補う所以なり。

ここでも「村鎮」がその「志」をもつのは、その事跡が、一般的には比較的記載の詳しい縣志にすらきめこまかくは記録されないからであると主張されている。しかしながらこの主張の根據には、平望鎮が記録に値する實體をもっているという認識があることにも注意しておかねばならない。「平望鎮は吳江の長橋の南に在り、西は具區（太湖）に連なり、東は吳淞に接し、南は嘉禾（嘉興府）を指し、北は淮揚に走る。蓋し四達の要津にして估帆百貨の争いて集まる所」であった。倭寇によって荒廢した後、現在にあっては「土風物産の美、民居市廛の稠密、仙宮佛刹の壯麗、並びに松陵の生色たり。何ぞ其れ盛んなるや。蓋し我國家、承平日久しく、海内富庶なり。故に一鎮の地と雖も、猶雄を吳越の間に稱するに



足る。此れ以て天下後世に傳示すること無かるべけんや」と記す。「清代の平和」の中でのこうした都市的集落としての繁榮が、鎮志の編纂の前提にあったのである。

乾隆中年以降、とくに續く嘉慶年間以降には、江南デルタの數多くの鄉鎮志の中で、縣志、府志、省志及び一統志の編纂における鎮の事跡の缺如を補うという點から、その編纂の必要性がしばしば述べられる。

乾隆三十九年（一七七四）、蘇州府崑山縣葑葑濱鎮、現在の崑山市陸家鎮を對象とする『葑溪志』は、同鎮の生員で、陝西巡撫畢沅の幕友をつとめるなどした諸世器の編纂になるが、その友人の杜綱の記した序には、次の一節がある。<sup>(34)</sup>

一統は一鄉の積なり。一鄉を重んずる者は一統を重んずるなり。今、一統よりして省、よりして府、よりして邑まで志有らざる莫きも、而れども鄉の志は絶少なり。故に里閭の軼事、多く湮沒して傳わらず。邑志に見る者有りと雖も、亦た闕略して詳らかならず。知らざりき、一鄉略されれば、即ち一邑略され、一邑略されれば、即ち一府略され、上よりして一省一統に至るまで、亦た盡く略されざる無し。然らば則ち鄉の志、顧りみて重んぜざらんか。

「鄉志」がなければ「里閭の軼事」は傳わらないし、假に「邑志」があつても省略されがちであるという論理展開のあり方自體はこれまでの例においても見てきた通りである。しかしながら、ここで注意したいのは、相互に關連をもつ二つの關係への認識が提示されていることである。第一は、「一鄉」が「一統」の不可缺の基盤であり、「一鄉」の堆積の上にのみ「一統」があるという、鎮中心の地域社會と全國的規模の社會との關係に對する認識である。第二は、「鄉の志」を基層とし、縣志、府志、省志、一統志に至る地方志自體の階層性とその相互の不可分な關係に對する認識である。このいずれかの關係への認識を明確に提示した序文が、この時期の鄉鎮志には廣く見出される。

第一の關係への認識としては、たとえば嘉慶十二年（一八〇七）刊の『方秦志』<sup>(35)</sup>（現上海市嘉定區方秦鎮）の卷一「發凡」——凡例——で編者王元烈が、次のような句を遺している。

學者惟だ鄉を忘れずして後能く天下に及ぶ。此れ鎮志の作らざるべからざる所以なり。

同年刊の『石岡廣福合志』<sup>(36)</sup>

(現上海市嘉定區馬陸鎮石崗村・寶山區劉行鎮廣福村) 編者の一人である蕭魚會は、その序で、

天下は國の積む所なり。國は鄉の積む所なり。然らば則ち一鄉の事は實に天下國家の事なり。孔子曰く、吾、鄉を觀て王道の易易たるを知る『禮記』鄉飲酒義第四十五、と。茲の志に於いて益ます信ずるなり。

と記している。鄉は天下の前提である。鄉の累積が天下國家を構成するが故に、一鄉の事が天下國家の事と等置されるのである。

こうした認識は、乾隆・嘉慶を待つことなく、康熙年間に見られる。康熙四十一年(一七〇二)に當時の蘇州府元和縣<sup>ユンシェン</sup>直鎮、現在の吳縣市<sup>ユンシェン</sup>直鎮の鎮志として編纂された『吳郡甫里志』<sup>(37)</sup>には、同鎮の人で編者である陳惟中の叔父にあたる蘇州府の人蔡方炳の序が寄せられており、そこに次の一節がある。

蓋し天下は一國の積なり。一國は一鄉の積なり。天下の大は、一鄉の小より積んで成る所ならざる靡し。里巷の謳吟をして、鄉の人の彙めて之を傳えること有らざらしむれば、其れ何を以てか之を太史に上せ、之を聖人より刪(えら)び、先を表して後に垂れんか。夫れ天下の責に任ずる者は天下を志し、一國の責に任ずる者は一國を志す。一鄉の責に任ずる者は、誰なるか。其の責無くして其の志有らんか。

「國」が媒介になっているが、「天下」は「鄉」を積み上げてこそ成立するという論理はすでにここに提示されている。それを前提として、天下の責と天下の志、一國の責と一國の志、及び一鄉の責と一鄉の志が平行的に存在することが提示されるのである。蔡方炳は、續けて「一鄉の風教を維繫するの士」としての陳維中が編纂の實務に當たったことに言及する。ちなみに、ここでいう所の「國」とは、先秦の「諸侯」の國を念頭においた省レベルの地方の行政單位の雅稱だとみなされる。

第二の關係、鄉志―縣志―府志―省志―一統志という地方志自體の階層性とその相互の不可分な關係に對する認識を提示した序文も、またこの時期の鄉鎮志には廣く見出される。たとえば、嘉慶九年(一八〇四)纂『朱涇志』<sup>(38)</sup>(現上海市金山區

朱涇鎮）、先引の嘉慶十二年纂『方泰志』<sup>(39)</sup>、同年纂『石岡廣福志』<sup>(40)</sup>、嘉慶二十年（一八一五）纂『馬陸里志』<sup>(41)</sup>（現上海市嘉定區馬陸鎮）などの場合であり、嘉慶十年纂『淞南志』<sup>(42)</sup>（現上海市閔行區紀王鎮・諸翟鎮）は、一統志、省志に直接の言及はないが、上記の關係への認識がうかがわれる。こうした認識がより顯著に見られる例を擧げておこう。

先引の雍正十年（一七三三）編纂の『平望志』の序においては、地方志の體系が、全國レベルの一統志、省レベルの通志、府レベルの府志、縣レベルの縣志という四つの階層に整理されたのち、第五番目の不可欠な階層として「村鎮」の「志」の存在が指摘されていた。道光六年（一八二六）の『雙鳳里志』<sup>(43)</sup>（現太倉市雙鳳鎮）の編者、同地の人である時寶臣の自序の前に置かれた鄰接唐市鎮の人譚天成の序には、「族譜」における「各支」の記載の役割が「全譜」において果たす役割を評價したのち、「地志の書も亦然るなり」として、

下、廣大に至るに郡縣の積む所に非ざる無く、郡縣又鄉里の積む所に非ざる〔無し〕。一郷の志成れば則ち邑州郡志此れに基づき、循りて省志・一統志、胥な此れに外ならざるなり。

と述べる。

光緒十九年（一八九三）刊の『菱湖鎮志』<sup>(44)</sup>（現湖州市菱湖鎮）における湖州府歸安縣の人楊峴の序文にもこういう。

夫れ志には一統志・省志・府縣志有り。鎮志に至りては隘（せま）きなり。然れども鎮志無ければ即ち府縣志は取材する所無し。府縣志無ければ即ち省志・一統志は徵信する所無し。故に鎮志は實に諸志の權輿にして、關係する所淺鮮に非ざるなり。

一方では、市鎮の上に、縣以上の、階層をなす行政組織の體系が、他方では、鄉鎮志の上に、縣志以上の、階層をなす官撰の地方志の體系が存立していることを、鄉鎮志の編者たちは非常に強く意識している。換言すれば、清代の鄉鎮志や市鎮を中心とする地域社會は、編者たちの意識の中で、地方志や行政組織の階層的編成における基底的な位置を占めていたのである。しかしながら、ここで見逃してはならないのは、一方で縣志という存在を常に敏感に意識する鄉鎮志の編者

たちが、他方では當の縣志及び縣志以上の地方志と鄉鎮志との大きな相違をも非常に強く認識していることである。

#### 四 官志との相違・人としての責任

きわめて明確であるのは、鄉鎮志の編纂に従事する人びとが、その表現の如何を問わず、鄉鎮志は、縣志、あるいは府志など、縣をこえる行政區域を対象とする地方志とは、後者が「官」の手によって刊行されるという點ではっきりと異なると考えている點である。前掲の雍正『平望鎮志』<sup>(45)</sup>の「凡例」第二項において、編纂に關係した同鎮の人々を代表する「西郊草堂主人」は、次のように述べている。

統志自り邑乘に至るまで、必ず總裁を立てて纂修す。各項の名色を採訪するより、以て同修諸公の履歷に至るまで、體統を存する所以なり。鎮志は官志に非ず。體裁は同里の諸君子の其の目の賭る所、足の歷る所を存し、以て一鎮の文獻と爲すに過ぎざるのみ。今、俗套を脱盡し、僅かに里人公輯と云うのみ。

その趣旨はほづこうであらう。一統志から縣志に至るまでの官撰の方志の場合には、必ず總裁以下の組織を構成して編纂する。各項目を立てて對應する分野を取材し、また卷首には編纂に従事した人びとの身分や姓名を記すなど、いずれも所定の基準を守らねばならないのである。鎮志はこうした官志ではない。官志にともなうさまざまな制約からは自由である。體裁としては、編纂に従事したこの鎮の同人の見聞・觀察の經緯を記しておくことに留意すればよく、それを通じて後代に残すべき一つの鎮の文獻とすればよいのである。そこで縣志以上の地方志編纂における通常のやり方を取らず、ただ「里人公輯」——鎮人の共同編集と記すだけである、と。

同じ觀點を、別の言い方で強く表現したものに、乾隆五十二年（一七八七）序のある、『濮鎮紀聞』<sup>(46)</sup>（現桐鄉市濮院鎮）がある。當該鄉鎮志の唯一の序は、趙佑なる人物によってしたためられている。序は、一統志の対象とする「天下」、通志の対象とする「直省」、郡・州・縣志が対象とする府・州・縣の規模がそれぞれに大きいことから説き起こし、鄉・鎮の

規模が、「一縣の中に就きて、之を析して一郷一鎮と爲す。其の小なること尙縣の一隅に當るに足らざれば、則ち直ちに以て小大を較ぶるに足らざるなり。崇侈を極めて之を言う」と雖も猶當る無きがごとくなり」として、いかに小さいかに論及する。續いて以下のように述べる。

且つ夫れ省志、郡州縣志、上(のぼ)りて統志、皆之を責めて官に在らしむ。館局を開き、經費を集め、數十人の多き、數十年數年の久しきを合して初めて一たび成る。成ること既に數年、或いは旋いで廢闕に即いて待つ有り。惟うに其の大なる、是を以て難し。而うして區區たる一郷鎮に於いては何をか有らんや。則ち又其の小大を較ぶるに足らざるなり。

一統志、省志、府志そして州志のいずれもが、「官」が責任を擔い、「館局」なる編纂のための組織を設立し、經費と數十人の編纂擔當者とを集め、數十年あるいは短くても數年の歲月をかけるが、郷鎮の志の場合にはこうした體制は組みようがない。同じ序の續く部分の表現によれば、

大は必ず諸を官に待つも、小は則ち人皆勉むべし。

ということになる。ここでも、縣志以上の地方志と郷鎮志との間には、官撰と民撰という決定的な相違があるのである。

先述の康熙『吳郡甫里志』<sup>(47)</sup>は、ちなみに、近年の『中國地方志總目提要』(上冊)<sup>(48)</sup>(前掲)の検討によれば、清代のこの時點ではじめて編纂されたものではなく、明代中葉以來、成化、隆慶、萬曆、天啓、崇禎と編纂の試行をしばしば重ねてきたものであるが、そこにも、郷鎮志と府縣志とを對比した編者陳惟中の次の言及がある。

往者(さき)に 金問川・趙甫陽の諸先輩、曾て里志を纂集するの學有るも、惜しむらくは未だ書を成さず。滄桑(明清王朝交替の激變)以後、復た漸く散佚し、今に迄るまで之に續く莫きなり。夫れ謂うに、志書の作、原より史書と相い表裏し、惟だ良有司のみ之を舉行するを得、郷先生之を裁定するを得るなり。此れ、郡邑の志則ち然り。一里の事の若きは、固より有司の及ばざる所にして、郷先生も未だ遑(いとま)あらざるところなり。

(自序)

府縣志までは、「有司」——地方官が企畫し、「郷先生」——郷紳が編纂に當たるが、「里志」——郷鎮志には、地方官も郷紳も關與しない。これが、郷鎮志と縣志以上の地方志との決定的な相違であるとする。光緒五年（一八七九）編纂、光緒十五年（一八八九）刊行の先引『羅店鎮志』<sup>(49)</sup>の編者である鎮人潘履祥も卷首における一文で次のように語っている。すなわち、光緒二・三年（一八七六・七七）の頃、各省で州縣志の編纂が命じられ、『寶山縣志』も刊行されることとなり、自らも作業に参加したが、經費が調達できずに中止され、同五年、「門を杜して家居し」、その夏を無爲に過ごす中で、にわかに、かつて羅店の「里志」を編纂しながら未刊のままに終わつた「范君」の後を繼ぐ決意をしたことに觸れ、縣志の成ると成らざるとは責は上に在り、里志の成ると成らざるとは責は下に在り。

郷鎮志編纂・刊行の擔い手は、縣志以上の地方志とは全く異なるのである。これは郷鎮志の編纂・刊行の場合である市鎮中心の地域社會と縣志以上の對象とするところの行政官が派遣される地域的な場との性格の相違でもある。すでに見たように、郷鎮志編纂が量的に顯著に増大しはじめた乾隆年間以降、郷鎮志、郷志、そして鎮志という呼稱が成立し、各市鎮において周邊の市鎮における郷鎮志編纂の動きが相互に強く意識されるに至つた。その中で、縣志—府志—省志—一統志という地方志の體系の下における郷鎮志と縣—府—省—天下という行政の體系の下における市鎮中心の社會とが、ともに基底的な存在として認識されるようになってゐる。にもかかわらず、一方で、ここ四節において見てきたように、郷鎮志は、縣志以上の地方志と峻別されている。このことは何を意味するのか。行政や文化のあり方とも關わるこの問いを解くのは容易ではないが、いづれにせよ、「官」に對する「人」の立場のこれほどまでに強い自覺が、清代ではどこから生まれるのかは明らかにされねばならない。郷鎮志編纂の擔い手とその地域社會との關わりとを検討したい。

## 五 鄉鎮志の編者と地域社會

### (一) 『棲乘類編』——十八世紀六十年代纂、未刊の稿本

鄉鎮志は、その固有の基盤をなすところの、市鎮を中心とする地域社會において、どのような人びとの手により、どのようにして編纂されていったのであろうか。若干の鎮志に即して検討しよう。

『棲乘類編』は、杭州市から大運河に沿って北へ、杭州市の郊區と現餘杭市内を進み、德清縣境で北東へ折れたところにある今日の餘杭市塘棲鎮、當時唐棲と呼ばれ、「巨鎮」と意識されていたこの鎮において、乾隆三十年（一七六五）に編纂された。その二年後、乾隆三十二年に編纂され、『武林掌故叢編』第二集に收められた『唐棲志略稿』<sup>(50)</sup>、光緒十六年（一八九〇）に刊行された『唐棲志』<sup>(51)</sup>と異なり、世に十分は知られないまま、燕京大學圖書館に、そして現在は北京大學圖書館に抄本が藏されている。『中國地方志集成』『鄉鎮志專輯』前掲には收められていない。

乾隆三十年に「逸民周兆謙」の名でしたためられたその「自序」によれば、同鎮の人、「家學を承け、日び研求を事とするも、未だ究奥を窺えざる」狀況にあった周兆謙は、かねて「吾郷の山水の形勢を取りて一冊に撰成し、名づけて『棲里圖說』と曰」った。周兆謙がこの鎮に關する先行の記録として尊重していたのが張之鼎（半庵）の『棲里景物略』であり、より強く意識していたのが、この『棲里景物略』を「増訂」した曹紀（菽園）の『棲水文乘』、一名『棲乘』であった。ちなみに『唐棲志』卷十二・志耆舊によれば「逸民」は正式の號、「堪輿を善くし」、「明の文選司郎周公の裔孫」であり、張之鼎及び曹紀はともに諸生であった。周兆謙の科舉制度上の位置にはとくに言及がない。「自序」ともども周兆謙の名を末尾に記す「凡例」には、

唐棲、素より志紀に乏し。康熙初、里中の宿儒張半庵・徐野君、始めて棲里景物略を集有せり。旋いで曹菽園、一生

苦志し、重ねて彙輯を加え、名づけて棲乗と曰う。

とある。「自序」には、周兆謙が曹杞の『棲水文乗』をふまえて『棲乗類編』を編纂した過程について、概略次のように記す。

『棲里景物略』を増訂した曹杞の『棲水文乗』は唐棲鎮の「志」としての實質をもっていたが、刊行には至らず、その子息の未亡人のところに二十餘年所藏されていた。その死亡後、散逸を恐れた人びとの釀金によって錢殷尙なる人物の手に置かれ、錢の死後、曹家にあった續稿とともに周兆謙とその同好の士の手に入った。周兆謙らは、その後二年の歲月をかけ、曹菽園の稿本を一般的な府縣志の體例によって整理し、十六卷の『棲乗類編』として編纂した。編纂の際、曹杞の原稿それ自體には手を加えないという方針が貫かれたが、もし増補する場合にも、「正（おしえ）」を有道（學問や道德のすぐれた人士）に就（こ）う」という態度で臨み、「臆斷」を避けた。『棲乗類編』もまた稿本のままで置かれ、刊行は後日に期された。

『棲乗類編』編纂に至る以上の経緯を見て、改めて確認されるのは、本書が先行する張鼎・徐野君の『棲里景物略』及び曹杞の『棲水文乗』とともに、地元<sup>(52)</sup>に志が必要であるという唐棲鎮在住の讀書人たち自身の發意になり、また彼ら自身の手で編纂されていることである。

『棲乗類編』がこのようにいわば地域の人びとの自發的な編纂になることは、以下の経緯からも明らかであろう。すなわち、かねてから「其の山水の清曠、衡宇相接し、鄉陋に類せざるが若き者を愛し」、『棲乗類編』の稿本完成のわずか二年後、たまたま鎮の人高齋中からそれを見せられた鎮外の一士人何琪（春渚）によって、「分類は繁冗駁雜にして、筆亦た猥駁なり」という批判を受け、この何琪が、後代から「筆甚だしく簡潔にして一鎮の掌故、仍お闕如に病しむ」とさえいわれるほど極端に簡略な『唐棲志略稿』を編纂したのである。公的に設置された編集局と財政的基盤をもち、必ず刊本として世に出される縣志の場合には、刊行後まもなくこのような改訂がなされることは一般的にはあり得ない。



しかしながら、同時に、地域の人びとの自發性は地域社會の直面する課題を解決したいという要請と緊密に結びついている。『棲乘類編』における『棲水文乘』の増補の仕方には、そのことが反映されている。『棲乘類編』の「凡例」はこの増補部分に關する説明に當てられている。そこには、『棲水文乘』の増補に加えて、後に言及するように『棲水文乘』の整理に當たつて範とした邑志、おそらくは康熙二十六年（一六八七）刊『仁和縣志』の缺如の補填をする意圖も窺われる。

「凡例」が特に言及している項目は、卷一「封畛<sup>シ</sup>」の城堡、街巷、橋梁、卷二「山川」、卷三「公署」、卷三・四にわたる「風土」のうちの土産及び徭役、卷六「水利」、卷七「恤政」、卷八・九・十・十一「人物」のうち、<sup>々</sup>名流<sup>々</sup>と括れたところの宜節・清介など七項目、及び、節婦、貞女、寓賢、卷十五・十六「藝文」である。周兆謙の觀點をとくに端的に示すのは、この中でも、橋梁、水利、恤政、物産及び<sup>々</sup>名流<sup>々</sup>などであるが、うち橋梁には次のように言う。

棲（唐棲鎮）は水郷に屬せば、橋非ざれば行く莫く、而うして河梁の功は最も溥（ひろ）し。第だ志（『仁和縣志』）の橋を載するに、棲は十にして二三に及ばず。如えば、長橋は規模の宏き、工程の浩なる、千里匹無し。歷次建修の事實、義を倡え資を捐すこと、嘉き猷（はかりごと）と懿（みごと）なる蹟（おこない）は、瑣珣（いし）に勒（きざ）むと雖も、若し成書に登さざれば、何を以てか感を興し善を興さん。（下略）

唐棲鎮の長橋は、縣志には記載されていないものの、規模は大きく、もし書物に記録されることがなければ公共事業への獻身の事實を通じて地域社會の人びとに今後の貢獻につながる感銘を傳えることができない、という。

「名流」の項中には以下の一節があり、縣志の缺如の補正への強い意欲がうかがえる。

人物は邑志の輯する所にして、大抵は諸の耳目に憑り、邇きを收め遠きを遺し、以て吾棲の表表たる名流にして聲海内に溢るる者、毎に遺漏と爲る。張・曹兩氏、其の文獻を蒐め、一つ一つ表漳<sup>チヤウ</sup>す。余因りて採りて以て分類し、各科に編入せり。

「凡例」の多くの項目を通して、『棲乘類編』の編者周兆謙の觀點は、同鎮地域社會の存立の基盤をなす公共的事業や活動を記録し、この種の事業や活動への關心を喚起してそのために貢獻する人材登場の契機とすること、及び廣く鎮の事實に關わる縣志の遺漏を補正することに置かれている。その意味で「凡例」の末尾近く置かれた「藝文」に關する項における「吏治民生に裨益する」の句及び「里中の公務」という用語は興味深い。

藝文・詩詞は、皆儒流の苦心に出ず。凡そ見聞する所、固より盡くは繕う能わざるも、亦た敢えて輕がるしくは棄てず。（中略）其の吏治民生に裨益する者有れば尤も當に收取すべし。（中略）里中の公務の若きは、碑碣に具わると雖も、其の文は地に隨いて登記し、或いは別に紀文に列す。一に往迹を稽循すべく、並びに觀感興起し、前功を踵繼すべしと云う。

『棲乘類編』は、その稿本完成後僅か二年にして、先に原文を引用したように、分類が繁雜で文章もごたごたしているという批判を『唐棲志略稿』の編者である何琪から受けることになる。たしかに、その實際の敘述は、たとえば、卷四「徭役」、卷六「水利」に典型的に見られるように、しばしば官側の通知や民間の上申からなる文書及び碑文を原文のままに羅列的に収録しており、そのことが體裁の蕪雜を非難される理由の一つになっていることは容易に推測できる。しかしながら、こうした資料の収集ふりや掲載のあり方自體、『棲乘類編』が地域社會のただ中で地域社會の人びとによって直接に編纂されたという事實を物語っている。

## (二) 『黎里志』・『黎里續志』——十九世紀初頭の刊本・十九世紀末の刊本

鄉鎮志の編者の存在形態が、當該の鎮の地域社會の住民で、公共的課題に強い關心を寄せていた人びとであることは、十九世紀初頭、清代の嘉慶十年（一八〇五）刊の蘇州府吳江縣の『黎里志』<sup>(54)</sup>、それを繼いだ十九世紀末、光緒二十五年（一八九七）刊の『黎里續志』<sup>(55)</sup>において、より明瞭になる。

『黎里志』は黎里鎮の人、嘉慶三年（一七九八）、捐納で監生・翰林院額外待詔の資格を得た徐達源<sup>(56)</sup>によって編纂された。

達源、少き時、即ち人の里中の往事を談るを喜び、閒ま聞く所有らば輒ち書に筆（か）く。長ずるに及び、新舊の縣志を閲るに、黎里と關涉せる者、三數頁に滿たず。心竊かに之を陋しむ。

（自序）

黎里鎮に對する強烈な郷土意識から出發して十六卷の『黎里志』を、「凡そ吾里に於いて一字相い及ぶ有らば、購うこと珍寶に同じく、寒暑既に忘れ、寢食亦た廢す」というように獨力で完成した徐達源ではあるが、「自序」の末尾に、

後の風を采る者、攷證する所有るに庶幾く、而うして里中の文獻、亦た是に藉りて畧ぼ梗（あらまし）を存せん。里人徐達源無際氏、孚遠堂に書す。

と記している。このように『黎里志』は、その完成後は、あくまで黎里鎮の人びとに繼承される公的記録としての性格をもつことになる。またその刊行に際しても、「自序」に、

脫藁の後、諸もろの相知れる、更ごも相い參訂して各おの其の是なるを求め、又二年、并びに貲を醸して刊に付す。是れ書の厚き幸いなるに非ずや。

と述べるように、鎮人を主體とするその知友が援助している。卷首の「參授姓氏」によれば、參訂・校字に關わった十五名のうち、「同里」、すなわち鎮人は十名を占める。ちなみに、他に吳江縣人四名、震澤縣人一名、及び秀水縣人二名が關わっている。

注目されるのは徐達源の活動が單に『黎里志』に止まるものではなかったことである。後に觸れる『黎里續志』卷二・善堂（義渡・義莊附）所載の李廷芳「黎里衆善堂碑記」には次の一節がある。

省城に舊より同仁堂・同善堂有り。法最も詳善にして、歲ごとに收瘞する所、廣く且つ多し。而うして外邑は未だ處處奉行する能わず。今、邑の黎里鎮、一堂を仿設し、衆善と曰う。堂中の所事、一に同善・同仁に法る。其の經始は

則ち待詔山民徐君（徐達源）、同志と貲を出して之を創る。其の經費は則ち闔鎮士民之を捐助す。其の規條は則ち徐君衆議を集めて之を酌定す。嘉慶壬申（十七年。一八一二）三月、前明凌太常の祠を假りて辦公の所と爲す。（中略）今、一鎮の士、踴躍施すを樂い、力めて此の舉を成す。

『黎里續志』善堂には、續いて楊圭「衆善堂碑記」があり、

衆善堂は吳江の黎里鎮に設けられ、而うして分局は震澤所轄の平望に在り。其の事、掩埋を以て主と爲し、而うして施棺・施衣・恤<sup>シ</sup>殮・惜字・放生等の會、焉に附す。嘉慶十七年、徐君（徐達源）同志とともに始めて貲を捐して黎里に創行し、未だ一年に及ばずして平望の諸善信、踴躍して輸するを樂う。

衆善堂は、放置されている死者の埋葬を主體に、棺と壽衣の支給、未亡人の生計支援、文字の書かれた紙や陶器などの始末、生物の保護など、江南デルタ都市部で普及した善堂の活動をここ黎里鎮及び鄰接する平望鎮で實施したのであり、徐達源はその首唱者であった。

徐達源の黎里鎮地域社會での活動は、嘉慶二十二年、汾湖巡檢周文瀾の提唱で行なわれた第二橋（染字圩）の建設への釀金、道光十八年における天隨橋（染字圩）の建設にも及んでいる。<sup>(57)</sup>

光緒二十五年（一八九九）刊行の『黎里續志』が黎里鎮の人、同治十一年（一八七二）の捐納による監生・候選縣丞である蔡丙圻<sup>(58)</sup>によって編纂された経緯も、『黎里志』が徐達源によって編纂されたそれと酷似している。蔡丙圻が「自序」で『黎里志』刊行以來九十年間の鎮に関する記録の缺落、近刊の『吳江縣續志』における黎里鎮關係の事實の省略と遺漏・誤謬の多さを指摘しているからである。また蔡丙圻も單獨で刊行を行なったのではなく、巻首の「參訂・校勘」によれば、これらの作業には二十人が従事し、このうち八人が黎里鎮人、あとは震澤縣四名、吳江縣四名、秀水縣三人、宜興縣一名となっている。

この蔡丙圻も徐達源と同様に、善堂の活動に深く關與していた。『黎里續志』卷二「善堂」によれば、蔡丙圻は、衆善

堂の建物自體の維持に携わっている。

同治十二年、里人沈光錦・張元灝・徐寶澍・蔡丙圻・王邦瑞等重修し、光緒十九年、里人沈光錦・蔡丙圻・王室蕃・張鳴騶、復修す。

衆善堂の運営を支える資産としての「公捐堂産」としては、吳江縣・震澤縣及び浙江の嘉善縣の土地及び吳江縣の房屋（家作）があつたが、蔡丙圻はその擴充に關與している。

光緒十年、里人沈光錦・張元灝・蔡丙圻・染字圩房屋一所計四間を續置す。十一年、里人蔡丙圻、吳江縣の田三十四畝七分五釐を續置す。十四年、里人沈光錦・蔡丙圻・王室蕃、改建せる染字圩房屋一所計十九間を續置す。

鄉鎮志の刊行それ自體が地域社會の公共的事業としての性格を帶びつつあつたことについては、光緒八年（一八八二）<sup>(59)</sup>刊、崑山縣周莊鎮の『周莊鎮志』の「凡例」において、編者陶煦、『租覈』の著者として知られるこの人物が次のような言及を行なっている。

適たま前年豫賑（河南への賑濟）を助けんと籌り、鎮中にて茶捐を舉行し、繼いで復た移して晉賑（山西への賑濟）・直賑（直隸への賑濟）を助す。賑事竣り、因りて錢太守卿銖に請い、此の歛を以て鎮志を刊刻すること及び他の善舉の用と爲し、用に敷るを俟ちて即ちに撤を議さんとす。太守之を許す。遂に庚申の冬抄、梓に付す。孰れか意圖わん、從弟已に見及ばざるなり。光緒八年、歲壬午に在り。夏四月、里人陶煦子春氏謹しんで識す。

周莊鎮では光緒七年（一八八一）、北方の災害救済のための義捐金募集を行い、蘇州知府の許可を得てその餘剰金で鎮志の刊行と鎮のその他の社會事業とを實施したという。十九世紀初頭、清代嘉慶後半から世紀の末、光緒年間にかけて蘇州府吳江縣の黎里鎮における鄉鎮志編纂の擔い手と鎮の公共的事業の擔い手との同一性は、ここ蘇州府崑山縣周莊鎮の鄉鎮志の場合にも檢證されるのである。

## (三) 『錢門塘鄉志』

——十八世紀末・十九世紀前半・十九世紀後半における稿本の繼承と二十世紀の油印本

清代乾隆末年、十八世紀末、江南デルタ地域社會における鄉鎮志編纂の普及の中で生まれた種子を成長させ、民國十年（一九二一）に刊行された『錢門塘鄉志』<sup>(61)</sup>の場合は、編者とその地域社會における活動との關連がきわめて明確である。

錢門塘は、南宋から明代にかけて繁榮した市鎮であつた。『錢門塘鄉志』卷十・藝文志上に收録された『錢門塘市記』「自序」によれば、南宋初に嘉定縣が設立されると、ここに倉庫が置かれ、運搬船が徐行浦から南へと進んで吳淞江に達しており、「故に人居稠密、商賈貿易して往來交通し、東西聯接すること四五里なり」という規模をもち、「士庶殷實、儼然たる小都會にして、幾んど南翔と埒（ひと）し」とされる。しかしながら、右の「自序」に「勝國季年自り日に彫零に就く」というように明末から衰え、上海市文物保管委員會鉛印本『錢門塘鄉志』の跋には、清代には「市百戸を過ぎず、鄉三千餘口を過ぎず」と記す。康熙十年（一六七二）の旱災に際し、嘉定縣下で鎮ごとにも粥の炊き出し場所としての廠を設置したことをふまえ、『錢門塘鄉志』卷一・歷代沿革表は、先に紹介した稻田清一の近年の見解とは異なり、同年に早くも錢門塘廠が成立したとする。同歷代沿革表によれば、清末宣統二年（一九一〇）から錢門塘鄉と改められ、中華民國もこれを踏襲した。現在では民國期の鄰鄉である望仙橋鄉が上海市嘉定區望新鎮となる一方、錢門塘は行政村たる錢門村として位置付けられ、市河の郭澤塘、これと交わる顧浦の水はいずれも豊かではあるが、老街のたたずまいはささやかである。

『錢門塘鄉志』の起源は、錢大昕・王鳴盛がともに序を記した『東晉南北朝輿地表』の撰者でもあるこの地の人、監生徐文範が、乾隆六十年（一七九五）、六十一歳の時編纂した先述の『錢門塘市記』<sup>(62)</sup>に遡る。その後、道光二十年（一八四〇）、のち同十三年に生員となったこの地の人、童善が、嘉定縣下の南翔・婁塘・安亭・外岡・方泰・馬陸各鎮では、嘉慶初年の段階でそれぞれ鎮志が刊行されているのに、錢門塘のみ缺如していることを嘆き、入手していた稿本の『錢門塘市記』

を補訂して『錢門塘鎮志』<sup>(63)</sup>を編纂したが、完成せぬまま死去した。童善の弟、童仁は同じく生員であり、兄の遺稿である『錢門塘鎮志』を「續成する」意向をもっていた。この童仁の次子で、同治五年（一八六六）の生員童以謙は、同治七年『嘉定縣志』編纂のための資料収集が行なわれたのを機會に、太平天国期に一旦亡失し、のち再び入手していた伯父童善の『錢門塘鎮志』の別本を繕寫して帙を作成し、訂正と補充を行なった。<sup>(64)</sup>童以謙の次子で光緒二十五年の生員童世高は、『舊篋に庋藏』されていたこの『錢門塘鎮志』稿本をふまえ、改めて光緒・宣統年間（一八七五—一九一一）に編纂を開始し、民國元年（一九一二）秋に脱稿、民國十年冬に補正を行った上、油印で『錢門塘鄉志』<sup>(65)</sup>を刊行した。『錢門塘鄉志』の「自序」で童世高は、次のように述べている。

比來、世高、時局の變遷に鑒み、先型の廢墜を懼れ、冒昧を揣らず、父老を訪求し、載籍を蒐羅し、參酌増訂し、重ねて釐定を爲すこと如干卷、聊か以て仰いで先志を承がんとするのみ。

辛亥革命から世界大戦を経るといふ未曾有の大變動期の中で、三代代前、大伯父から繼承してきた錢門塘地域の鄉鎮志を刊行するための、いわば最後の機會に對する童世高の切實な氣迫が傳わつて來る。『錢門塘鄉志』に至る當地域の鄉鎮志の編纂事業は、十九世紀前半、道光年間以降は、童善・童仁兄弟から童以謙・童世高父子に繼承されてここに至つたのである。しかしながら、童一家は、この間、鄉鎮志の刊行のみにかかずらわっていたのではない。鄉鎮志は彼らの地域社會における活動の一環として位置附けられる。

童以謙の第四子、世高の二人目の弟に當たる世亮に關する近年の論文「實業家童世亮傳略」（『嘉定文史資料』第五輯。一九九〇年）では、「童世亮、字季通、一八八三年三月十二日、嘉定錢門塘上の一戸父子五人入泮せる書香の門第に出生す」とある。すでに見てきたように、その世高兄弟の祖父で、兄弟の父以謙の父に當たる仁も、以謙の伯父善もみな生員であった。童一家の特徴は、讀書人であるとともに、その本來の當爲として想定されている地域における社會的實踐に従事したことであった。

『錢門塘鄉志』卷十二・雜錄志・災祥軼事には、道光二十九年（一八四九）四月二十九日から始まる六十日の長雨による凶作の條があり、童以謙の「水災記略」という一文が收掲されている。<sup>(66)</sup>そこには、「啼哭の聲、慘として聞くに忍びず、衣服典し盡くせば、則ち器皿雜物を售りて以て食に易え、甚だしくは且つ磚甃を運び、棟椽を折り、樹木を伐りて以て售る」という被害の模様、錢門塘廠における米と棉花の平糶に獨力で當った秦氏質庫の活動、佃戸の大半が「家に儲蓄無き」客民になっている太平天国以後に、もしこの規模の大水害が見舞っていたらという懸念など、克明な記事が書き留められている。その中で、嘉定縣知縣陳銘が「廠を分け董を擧げて荒を賑し、并びに善後の事宜を籌った」ことが記される。同じ雜錄志・災祥軼事には、光緒二十五年（一八九九）に、「鄉民、穀を擔ぎて倉に歸す」の條があり、二十七年春にも同じ條があって、それぞれに「童以謙曰」に始まる文章が附されている。<sup>(67)</sup>そこには、光緒二十三年（一八九七）冬の不作から翌二十四年春に至る嘉定縣城西部一帯の佃戸の絶糧状態、とりわけこの中で多數を占める錢門塘郷の佃戸の苦況、その救済のために行なわれた光緒二十四年、錢門塘・望仙橋・安亭三廠の貧民に對する嘉定縣南倉の倉穀の貸與、二十七年春における再度の貸與が記録されている。

また雜錄志・災祥軼事のこれらの箇所には、道光二十九年、嘉定縣當局が「廠を分かち董を擧げて荒を賑する」に際しては、童以謙の父童仁が「其の役に與かり」、光緒二十三年の米穀貸與に當たっては、童以謙が、嘉定縣城の「城紳」と協議し、「各廠の董事」が事後の救済米返還の困難に想到して責任をとろうとしない中で、安亭・望仙橋兩廠の董事との間で話をまとめて實施に移し、同二十七年には錢門塘・望仙橋の貧民の訴えを受け、縣の倉穀の貸與について主動的な役割を演じていることも記されている。<sup>(68)</sup>すなわち、道光二十九年當時、童世高の祖父童仁が錢門塘廠の董事であり、光緒二十年代には父童以謙も同じ董事であったことが明らかになる。十九世紀半ば前後から童仁・童以謙父子は錢門塘地域社會の行政上の責任者だったのである。

二十世紀に入り、清朝はその最終段階で立憲制度の導入を企圖し、光緒三十二年（一九〇六）、預備立憲の詔敕を下し、



同三十四年の「城鎮鄉地方自治章程」と「同選舉章程」の公布以來、全國各地でいわゆる地方自治が開始される<sup>(69)</sup>。編者童世高のこの地方自治に對する評價は非常に高く、『錢門塘鄉志』卷五「自治志」冒頭には、

憲政舉行さるるや、我が鄉の選ばれし諸子は、類ね能く民意を宣べて公益を圖る。今旗を偃<sup>(ふ)</sup>せ鼓を息むと雖も、口碑は尙人間に在り。

とし、民國三年の袁世凱によるその廢止に對する強い抵抗の意を示す。

童以謙・童世高父子はともに「我が鄉の選ばれし諸子」として光緒末年から宣統年間を経て民國初年に至る錢門塘地域における自治活動の中で主動的な役割を演じた。卷五「自治志」によれば、童以謙は、まず「里紳」の一人として「自治選舉の事宜を籌辦し」、さらに郷佐に當選、續いて郷董に選出され、民國二年、「年老を以て辭職し」た。他方、童世高は民國二年一月郷議員に、續いて同年五月、郷董に選出された<sup>(70)</sup>。

童氏三代の人びとの錢門塘地域社會における公的活動をもっとも集約的に示すのが、清朝による科舉廢止以後、光緒三十一年(一九〇五)秋に始まる童以謙・童世高父子の學校の設立と經營である<sup>(71)</sup>。『錢門塘鄉志』卷六「學校志」はこれを對象とする。これによれば童以謙は錢門塘蒙學堂で學董・校長を、童世高は民國三年に錢門塘・望仙橋二郷の合併によって生まれた第三郷立第二初等小學校と後身の第二國民學校で學董・校長を勤めている。

## む す び

望仙橋郷は嘉定縣城西部に位置し、すでに觸れたように錢門塘郷に鄰接していた。錢大昕の故郷である。「鄉鎮志專輯」第五冊にあわせて收録されている民國十六年の『續望仙橋鄉志稿』は、光緒年間に『望仙橋鄉志稿』を編纂した張啓泰の弟子である楊大璋の手になり、稿本として保存されてきたものであるが、その「自序」の次の一節は、民國十六年(一九二七)、本書の編纂を志して作業を進めたものの、ある人物の發言に接して一時筆を擱いていた楊大璋が、たまたま

錢門塘郷の童世高に出會い、「郷志」編纂のあり方について質問したことから始まる。

十一月十三日、事に因りて城（嘉定縣城）に晉（す）み、歸途に錢門の童丈凌蒼（童世高）と舟を同じくす。因りて郷志を修輯するの道を以て問いを爲す。對えて曰く、其の見聞に憑りて私意を雜えず、平心靜氣もて以て之を求め、門を分け類を別ちて以て之に處らしむれば、孰れか能く之を偽りと謂わんや。君には尊翁（岳父）の顧問となる有り。一郷の故實、何ぞ瞭なること掌を指す如きに難からん。更に之に益すに調査を以てせば、一を掛けて萬を漏らすの譏、亦た免るる可きなり。並びに云う。郷志の輯、利を鰲（お）う者は爲さず。此の地方經濟窘迫の秋、尙お何ぞ郷志の編輯に暇あらんや。君既に志有れば、尙お之に勉めんことを希う、と。余、言を聞き、遂に又其の責を以て自ら負えり。

「そのことから何らかの利益を引き出そうとするものは郷志の編纂には従事しません。まして地方經濟が窮迫している折から、郷鎮志の編纂に時間を割く者はおりません。あなたが志をもっている以上、さらに努力されんことを望みます。」

『錢門塘郷志』の編者童世高は、郷鎮志の編纂はそのこと自體を自己目的とする無償の行爲であり、編纂の擔い手の「志」——意志こそ編纂の原動力であるとする。乾隆末年から嘉慶・道光年間を経、光緒・宣統年間から民國初年へと、

江南デルタにおける郷鎮志編纂が顯著に量的展開を見せ、郷鎮志、郷志及び鎮志などの名稱が成立・普及してきたのと平行して、『錢門塘郷志』も歩一步と稿を著積し刊行に至る。しかしながら、童世高の右の發言は、その編纂の過程及び刊行それ自體が決して容易なものではなく、徐文範の着手の後を繼いだ童家歴代の「志」のみに依據してきたことを示唆している。明後半期の江南デルタの郷鎮志に即して確認された編纂における強い内發性は、郷鎮志の特徴として、その編纂が盛期を迎えた清代においても繼承されたのである。一八世紀前半の康熙四〇年代と雍正一〇年代に見いだされたところの、郷鎮志は「官志」ではないという認識が、この世紀八十年代後半の乾隆末年にも、そして清末十九世紀八十年代の光緒中年にもまた確認されることはこの内發性と關わるものであろう。冒頭に提示した明代郷鎮志の編纂における内發性を構成する五つの側面それ自體を清代について逐一検討することはしないが、ここまでの行論を通じてそれらのいずれもが

清代の場合にも基本的に妥當することは確認できよう。

清代乾隆年間以降の江南デルタ鄉鎮志編纂への契機を、明代のそれと比べて特徴づける鄉鎮志編纂をめぐる市鎮間の相互認識と縣から府、省、そして天下に至る地方志の體系への認識とは、この内發性とどのように關わるであらうか。

相互認識についての例示を行なった江南デルタ北部の嘉定縣はたまたま救荒活動に起源をもつ廠という名稱で、中央部の吳江縣は軍營の管轄區域に關わる大汎という名稱で、それぞれ市鎮を中心とする行政領域の成立を跡附けることのできる地域であることを想起すると、これらの地區では、市鎮を中心とする地域社會が同じような内實をもちつつ網の目のように展開していたことになる。このような市鎮中心の地域社會群の展開が市鎮間の相互認識を媒介し、鄉鎮志編纂への外的契機となったと言い得るであらう。

地方志の體系の認識について言えば、表2で見たように、清代は、上海市、江蘇省及び浙江省の現存の縣志、府志及び省志の五七・二七%が編纂された時代であることに改めて注意したい。歴代王朝の中で、清代は縣志から省志に至る官撰地方志の體系がいわば實質的に構築された時代であることは明らかであり、この體系の基盤をなす縣志編纂の際の採訪や刊行時における史實の採否など、鄉鎮志編纂への様々な外的契機が派生した。清代における鄉鎮志の編纂における内發性は、こうした外的契機に媒介されていた點で明代の場合とは異なっている。

しかしながら、外的契機による媒介は、清代の鄉鎮志編纂における内發性の弱さを示すものでは決していない。十九世紀の初頭刊行の吳江縣黎里鎮の『黎里志』編者徐達源、十九世紀末年の『黎里續志』の編者蔡丙圻、十九世紀前半、道光年間から、二十世紀初頭の清末民國初にかけて『錢門塘鄉志』を完成させた嘉定縣錢門塘郷の童氏の人びとはいずれも地域社會の公的事業に直接従事していた。「諸の同好」とともに『棲水文乘』の稿本を入手し、『棲乘類編』の編纂に關わった周兆謙も、こうした事業への強い關心をもっていた。さらに、彼ら十八世紀以降の鄉鎮志編纂の擔い手たちは、雍正十年の『平望鎮志』が、あえて姓氏を出すことはなかったが、「里人公輯」と自己規定して諸個人の關與を示したように、

一個人でなく複数の同志である場合も少なくない。郷鎮志の量的擴大はこれらのことどもとからみあいながら進行した。この意味で、清代江南デルタの郷鎮志編纂における内發性はむしろ前代に比してさらに強まったと言えるであろう。それは、市鎮中心の地域社會が、その固有の領域の形成やこの領域への自覺の事例を見出し得るほどに確立してきたことの反映でもある。

もとより郷鎮志の擔い手となった市鎮在住の生員監生層の存在形態と性格、ここまで市鎮を中心とする地域社會と呼んできた社會統合のあり方やその經濟的基盤、またそこでの公的課題については、さらなる具體的検討がなされねばならず、そのためにも個々の郷鎮志とその關連の縣志の内容の掘り下げが必要である。近年の清末民初に至る清代地域社會の研究からも學ばねばならない。また、民撰と官志という對比と絡み合ったところの郷鎮志と縣志以上の地方志との間の深い溝は宋代以降の王朝國家の行政や文化の質と關わる根本的な問題でもある。本稿は明後半期に始まり清代に至る江南デルタ郷鎮志編纂の検討が地域社會に視點を置くこの時代の研究の糸口の一つとなることを示したに過ぎない。

## 註

- (1) 「清代の郷鎮志における地域社會觀——江南デルタに即して——」及び「江南デルタ郷鎮志目錄」(森正夫編『舊中國における地域社會的特質』—平成2～5年「一九九〇—一九三年」度科學研究費補助金一般研究(A)研究成果報告書。一九九四年三月)。
- (2) 「江南デルタの郷鎮志について——明後半期を中心に——」(小野和子編『明末清初の社會と文化』。京都大學人文科學研究所。一九九六年)。以下前稿と稱する。
- (3) 「清代の郷鎮志における地域社會觀——江南デルタに即して——」(森正夫編『舊中國における地域社會的特質』前掲)。
- (4) 稻田清一「清末江南の鎮董について——松江府・太倉州を中心として」(森正夫編『江南デルタ市鎮研究』。名古屋大學出版會。一九九二年)。同「清代江南における救荒と市鎮——寶山縣・嘉定縣の『廠』をめぐる——」(『甲南大學紀要』文學編八六。一九九三年)。
- (5) 稻田清一「清末、江南における『地方公事』と鎮董」(『甲南大學紀要』文學編一〇九。一九九九年)。
- (6) 太田出「清代綠營の管轄區域とその機能——江南デルタの汎

を中心に―」(『史學雜誌』一〇七編一〇號。一九九八年)。

- (7) 張研「清代市鎮管理初探」(『清史研究』一九九九年第一期)。

- (8) 佐藤仁史「清末・民國初期における一在地有力者と地方政治―上海縣の『郷土資料』に即して―」(『東洋學報』八〇卷二號。一九九八年)。

- (9) 濱島敦俊「明清時代、江南農村の社と土地廟」(『山根幸夫教授退休記念・明代史論叢』汲古書院。一九八九年)。夫馬進「善會、善堂の出發」(小野和子編『明清時代の政治と社會』京都大學人文科學研究所。一九八三年)。のち同『中國善會善堂史研究』(同朋舍出版。一九九七年)に所收。

- (10) 森正夫「朱家角鎮略史」(森正夫編『江南デルタ市鎮研究』前掲)。

- (11) 上海。江蘇古籍出版社。以下、本稿で個別の郷鎮志を引用する際には、特に断らない限り、本『中國地方志集成』「郷鎮志專輯」所載のテキストを用い、その所收の冊數を表示する際は、「郷鎮志專輯」第□□冊と表示する。

- (12) 漢美圖書有限公司。一九九六年。

- (13) 羅叔韶修・常榮纂『澉水志』南宋紹定三年(一二五六)修。「郷鎮志專輯」第二十冊所收。

- (14) 「郷鎮志專輯」第八冊所收。

- (15) 「郷鎮志專輯」第二十二冊上所收。

- (16) 「郷鎮志專輯」第七冊所收。

- (17) 「郷鎮志專輯」第四冊所收。

- (18) 「郷鎮志專輯」第二十四冊所收。

- (19) 「郷鎮志專輯」第二十三冊所收。

- (20) 「郷鎮志專輯」第九冊所收。

- (21) 「郷鎮志專輯」第三冊所收。

- (22) 稻田清一「清代江南における救荒と市鎮―寶山縣・嘉定縣の『廠』をめぐって―」前掲。

- (23) 「郷鎮志專輯」第四冊所收。

- (24) 「郷鎮志專輯」第四冊所收。

- (25) 稻田清一「清代江南における救荒と市鎮―寶山縣・嘉定縣の『廠』をめぐって―」前掲。

- (26) 太田出「清代綠營の管轄區域とその機能―江南デルタの汎を中心に―」前掲。

- (27) 「郷鎮志專輯」第六冊所收。その他、同治九年(一八七〇)纂『雙林鎮志』(「郷鎮志專輯」第二十二冊下所收)は現湖州市雙林鎮の郷鎮志であるが、その「凡例」には、「今乃ち四周の郷村各おの十里を定めて界限と爲し、以て本志の鎮界と爲す」と述べる。

- (28) 「郷鎮志專輯」第三冊所收。

- (29) 「郷鎮志專輯」第三冊所收。

- (30) 一九六二年に油印で同名の『上海方志資料考錄』として上海師範大學圖書館から刊行され、一九八五年に補訂を加えて上海書店から刊行された。

- (31) 「郷鎮志專輯」第十四冊所收。

- (32) 上海市文物保管委員會鉛印刊行『上海資料叢編』所收本(一九六二年)。

- (33) 「郷鎮志專輯」第十三冊所收。

- (34) 『葦溪志』は「郷鎮志專輯」第八冊所収。なお、編者諸世器と畢沅との関わりは、この第八冊所収の民國二八年鉛印本卷頭の胡國掇撰の「諸世器傳」に記されている。

- (35) 「郷鎮志專輯」第三冊所収。  
 (36) 「郷鎮志專輯」第三冊所収。  
 (37) 「郷鎮志專輯」第五冊所収。  
 (38) 「郷鎮志專輯」第一冊所収。  
 (39) 「郷鎮志專輯」第三冊所収。  
 (40) 「郷鎮志專輯」第三冊所収。  
 (41) 「郷鎮志專輯」第三冊所収。  
 (42) 「郷鎮志專輯」第四冊所収。  
 (43) 「郷鎮志專輯」第九冊所収。  
 (44) 「郷鎮志專輯」第二十四冊所収。  
 (45) 「郷鎮志專輯」第十三冊所収。  
 (46) 「郷鎮志專輯」第二十一冊所収。  
 (47) 「郷鎮志專輯」第五冊所収。  
 (48) 『中國地方志總目提要』前掲「江蘇省地方志述表」。  
 (49) 「郷鎮志專輯」第四冊所収。  
 (50) 「郷鎮志專輯」第十八冊所収。  
 (51) 「郷鎮志專輯」第十八冊所収。  
 (52) 『唐樓志略稿』序。「分類」以下の一節の大意については後文を参照。
- (53) 『唐樓志』卷二十・雜記。  
 (54) 「郷鎮志專輯」第十二冊所収。  
 (55) 「郷鎮志專輯」第十二冊所収。

- (56) 『黎里志』卷六・例仕表・嘉慶三年。

- (57) 『黎里續志』卷二・橋梁。

- (58) 『黎里續志』卷五・例仕表・同治十一年。議敘表にはその後の官歴がある。

- (59) 「郷鎮志專輯」第六冊所収。

- (60) 鈴木智夫『近代中國の地主制―租廩の研究譯注』（汲古書院、一九七七年）。

- (61) 「郷鎮志專輯」第四冊には南京大學圖書館所藏の抄本の影印が收められているが、判讀が困難な部分もあり、本稿では、上海市文物保管委員會刊行の『上海史料叢編』の鉛印本（一九六三年）を用いた。

- (62) 『錢門塘郷志』卷十・藝文志・史部には、「地理類」合計六部の最初に、本書に関する簡潔な刊記があり、續いて「錢大昕序」及び「王鳴盛序」の全文が収載されている。

- (63) 『錢門塘郷志』卷十・藝文志・史部に「錢門塘郷志 童善輯」とあり、「趙翰序」及び「童以謙跋」を収載する。この兩文による。

- (64) 前註の童以謙の跋及び童世高による『錢門塘郷志』「自序」。

- (65) 前註の童世高の「自序」及び註(61)の上海市文物保管委員會鉛印本における同委員會の跋（一九六三年九月）による。

- (66) 『錢門塘郷志』卷十二・雜纂における道光二十九年四月二十九日以来の水災に関する「童以謙水災記略」。

- (67) 『錢門塘郷志』卷十二・雜纂における光緒二十五年冬の條、及び同二十七年春の條にそれぞれ載せられた「童以謙

日」の項。

(68) 前註に同じ。

(69) 清末民國初の地方自治に關するわが國の最も早期の研究として寺木徳子「清末民國初年の地方自治」(『お茶の水史學』五號。一九六二年)があり、最も新しい研究の一つとして黃東蘭「清末地方自治制度の導入と地域社會の對應」(『史學雜誌』一〇七編一號。一九九八年)がある。

(70) 錢門塘鄉及び鄰接地區における一連の選舉に關する以下の記述は、最低限の範圍に止まるが、すべて『錢門塘鄉志』卷五「自治志」・各機關選舉記略による。

(71) ここでは錢門塘鄉における學堂及び學校の設立と經營の經緯を詳述し得ない。清末の教育改革については、高田幸男「清末地域社會における教育行政機構の形成—蘇・浙・皖三省各廳州縣の狀況—」(『東洋學報』七五卷一・二號。一九九三年)がある。

〔附記〕 最近中國で刊行された地名關連の文獻及び地圖類によれば、このところ中國では地方行政區畫の呼稱の變更が顯著に進行している。特に上海市嘉定縣が嘉定區になるというような區制、江蘇省蘇州市轄區吳縣が吳縣市になるというような市制、及び上海市閔行區紀王鄉が紀王鎮となるような鎮制の實施などによる影響が大きい。したがって、筆者が一九九四年に改訂・公刊した「江南デルタ鄉鎮志目錄」前掲において比定している江南デルタ鄉鎮志の對象地域の現在地名は大きく

く修正を加える必要に迫られている。本稿の執筆に際しては、今夏、舊嘉定縣縣志編纂委員會副主任をつとめておられた倪所安氏及び吳江市地方志公室主任沈春榮氏のご教示を得たほか、以下の文獻・地圖に依據して現在地名を比定した。

① 《上海地名志》編纂委員會編、陳征琳・鄒逸林・劉君徳主編『上海地名志』(上海社會科學院出版社。一九九八年)

② 相遠紅・周瑞祥主編『上海市實用地圖冊』(中國地圖出版社。一九九八年)

③ 上海市測繪院編制『上海市嘉定區商務交通圖』(中華地圖學社。一九九八年)

④ 上海市測繪院編制『上海市寶山區商務交通圖』(中華地圖學社。一九九八年)

⑤ 《中國鄉鎮・江蘇卷》編纂委員會編、吳鎔主編『中國鄉鎮・江蘇卷』第Ⅰ卷・第Ⅱ卷・第Ⅲ卷(新華出版社。一九九七年)

⑥ 冬嘯木編『江蘇省實用地圖冊』(成都地圖出版社。一九九八年)

⑦ 江蘇省全方地圖應用開發中心・吳江市旅游局聯合編制『吳江旅游交通圖』(福建省地圖出版社。一九九八年)

⑧ 浙江省建設廳・浙江省測繪局編制『浙江省地圖冊』(中華地圖學社。一九九八年)

本一九九九年八月附けで、川勝守著『明清江南市鎮社會史研究—空間と社會形成の歴史學—』が汲古書院から汲古叢書二〇として刊行された。ただすでに初校終了後であったので、本稿の中で言及することができなかった。

## TOWN GAZETTEERS AND LOCAL COMMUNITIES OF THE JIANG-NAN DELTA IN THE QING DYNASTY

MORI Masao

Many of town gazetteers (Xiang-zhen zhi 鄉鎮志) began to be compiled in the Jiang-nan delta 江南デルタ from the latter half of the Ming dynasty, and the compilation activities became noticeable since the Qianlong 乾隆 era, particularly after the Jiaqing 嘉慶 and Daoguang 道光 periods of the Qing dynasty. The name, Xiang-zhen zhi, itself originated from this time, and the editors who were resident in shi-zhen 市鎮, that is, local market towns, recognized the establishment of local communities through the distribution of daily commodities among these local market towns and their outlying farming villages. In the northern and central parts of the Jian-nan delta, these communities came to be dealt with as administrative units one level beneath prefecture.

One of the external factors behind the sudden increase in the compilation of town gazetteers was the growing popularity of town gazetteers in adjacent districts. Another reason is that the establishment of a hierarchical structure of gazetteers at the prefectural, county, province and state level was deemed necessary to complement the hierarchical, administrative structure comprising prefecture, county, province and state. These two factors were instrumental in promoting the compilation of town gazetteers as the local histories about local communities centering on shi-zhen. Nevertheless, the editors of town gazetteers were keenly aware of the obvious difference between local histories compiled by the government and town gazetteers that were voluntarily compiled by the residents of local community. This awareness is reflected in the series of town gazetteers compiled between the 1760s and the early 20th century, which shows that the editors were deeply involved in the practical issues common to their local communities. The rapid increase in town gazetteers factors mentioned above. However, the spontaneity that was already manifest in the compilation of town gazetteers in the latter half of the Ming dynasty, reflected the establishment of shi-zhen centred communities, and was further strengthened during the Qing dynasty.